

<解説>

就職支援・キャリア教育における
ツールの現代的な意義

JILPT主任研究員 下村 英雄



就職支援・キャリア教育を含むキャリア支援の研究全般で、2000年代以降、大きなパラダイム・シフトが生じたと言われている。

それは、確固たる価値規範が存在する安定的な社会から、人を導く価値規範が存在しない不安定な社会への変更であり、端的には、先を見通すことができた社会から、もはや予測が不能な社会への移行に伴うものである。

こうした社会の大きな変化に伴って、キャリア支援の基本的なものの見方は大きく変化した。それを受けてキャリアガイダンス・ツールのあり方も大きく変化した。もともとキャリア支援というものは一般に考えられている以上に社会経済の動向に影響を受ける。キャリアも職業も仕事も、時々の労働市場、雇用動向、就業構造を反映して目まぐるしく変化する。それに的確に対応しようとするれば、当然ながらキャリア支援の様相も変化せざるを得ない。

では、キャリア支援はどう変化したのか。特に、現在、キャリア支援でツールを活用する意義はどう変化したのだろうか。

キャリア支援におけるツール活用の理論的背景は、よく知られたマッチング理論である。最も古いキャリア理論であるマッチング理論は、それ故、最も素朴でもある。就職をする自己と就職先である職業との最適なマッチングというものを想定し、そのマッチングに向けて支援を行う。具体的には、自己の特徴を十分に理解し、あわせて職業の特性を十分に調べ上げ、その両者の適合性を最大化することを目的とする。そして、基本的には、この自己の特徴を知るためにこそツールは用いられる。すなわち、自己理解のために用いられる。

したがって、安定的な社会から不安定な社会へという現代社会の基調をふまえた時、ツール活用の現代的な意義とは、第一に、正確に自己を認識し、理解し、

評価することにある。不安定で先を見通せない世の中だからこそ、何らかの確固たる指針が必要となる。将来に向けて歩いていく際、自分が得意なのは、飛ぶことか泳ぐことか走ることか。自分が好きなのはそのどれなのか。自分を明確に把握することが将来に踏み出す基礎となるということに、さほどの贅言は要しないであろう。むしろ、不安定な社会に飛び出す時、自分を理解していないということは、極めて危険なことなのだと言えよう。自らの特性の正確なアプレイザル（評価）というツール活用の目的は、現代においても重要な意義を持つ。

第二に、一方で、不安定な社会においては、自己を理解し、ある程度の見込みをもって一步を踏み出していくとしても、それが常に見込み違いを孕み、したがって常に間違っている可能性がある想定する必要がある。それ故、常に自分の現状と自分が進んでいる方向を確認しなければならない。安定的な社会ではあまり問題にならなかったツールの現代的な意義として、自らをモニターする働きが重要になる。安定的な社会では将来を見通す予測が重視されたが、それが難しくなるにつれて、むしろよりいっそう重視される意義は、現在の自分を振り返り、省察する機能である。常に自らを省みつつ、自分が進む方向を確認しながら歩まなければならない。あわせて大切になるのは、自らのキャリアを自ら作り上げていくという観点である。そして、これこそが、この20年間に国内外のキャリア支援の研究者が強調するパラダイム・シフトの中心になる。どこか人のキャリアが自然と成長していくというニュアンスのある「キャリア発達」という言葉は、自らキャリアを形作り、意味を付与していかななければならないとする「キャリア構築」という言葉に更新されるに至った。ツールが果たすモニターの機能はキャリア構築の必然性と表裏一体である。

第三に、このキャリアの構築を自己内で完結するの

ではなく、他人との関わりの中で考えなければならないという主張も、現代的なキャリア支援の研究者からは多くなされる。外側に確固たる価値規範がなく、どこに進むべきかの羅針盤が機能しない時、頼るべき手がかりの一つは他人ということになるだろうか。本人が自分なりに作り上げようとしているキャリアが、少なくとも自分が納得しうる意味の連鎖になっているか否か、すなわち、自分が一定程度、納得がいくストーリーや物語を、自分の中に感じ取れているか否かが重要になる。ここに他人を巻き込む必要は必ずしもないのだが、本人のキャリアが独善的なものとならないよう、ストーリーや物語を見てくれる観客を想定し、そのフィードバックを、以後、自らが紡ぎ上げるキャリアの一つの指針とする。現代のキャリア論で多用される「物語」という言葉は、そこに一連の筋書きがあることもさることながら、それが潜在的に第三者に見られることを含意するという点に強調点がある。

上記3点をまとめると、就職支援・キャリア教育におけるツールの現代的な意義とは、不安定な社会にあって何らかの良いキャリアを作り上げようとする際に必須となるキャリア戦略を、側面から手助けするものであると言えよう。それは自らの特性の正確な理解を試みて当座見つけた自分の中の指針に基づき、まずは一步を踏み出してその結果をモニターし、そのズレを他人と確認するという作業を支援するものである。

そして、こうしたアプレイザル（評価）、モニタリング（観察）、コンストラクション（構築）といったツールの現代的な意義を受けて、今現在、ツールも用意されている。

従来から広く活用がなされているいわゆる職業興味検査、職業適性検査は、おもにアセスメントからモニ

タリングを重視したものである。こうした簡単な質問項目に答えていくことで数値によって客観的にタイプや類型、特徴が明らかになるテストを、専門用語で量的アセスメントと言う。このタイプのアセスメントのニーズは、不安定化する社会の中でいっそう重要性を増していく。自分なりに漠然と把握している自らの特徴を、数字によって明確にはっきりと目に見える形で目の前に提示してくれてこそ、次なる行動をモニターするための基準となる。一国の労働者のスキル形成を手助けしようとするのであれば、この種のアセスメント・ツールは今後も継続して整備されていく必要がある。

一方で、最近のキャリア・アセスメント研究が強調するのは、モニタリングからコンストラクションを支援するタイプのアセスメント・ツールである。トランプのようなカードを手渡して作業をしてもらったり、白い紙を渡して線を書いてもらったり、何らかの不定形な課題を提供する。その作業をするなかで、自らのキャリアをモニターし、振り返り、作業後にはその内省を誰かと共有する。そして、ある程度、筋道の立ったストーリーや物語というものが、自分の納得のいく形で作り上げられようとしているのか否かを考える。こういう類のアセスメントを質的アセスメントと呼び、そのために使われる課題が、例えば、カード式ツールということになる。

就職支援・キャリア教育におけるツールの活用にあたっては、その時々で、量的アセスメント・質的アセスメントを使い分け、アプレイザル（評価）、モニタリング（観察）、コンストラクション（構築）を考えていく必要がある。ツールの研究・活用・実践は、今後も、社会経済の大きな動きに連動して、その姿を様々に変えながら人々のキャリアに伴走していこう。

Mail magazine
メールマガジン

労働情報

雇用・労働分野の最新情報を配信中！
週2回(水曜日と金曜日)無料配信



パソコン・携帯から

カンタン登録



<https://www.jil.go.jp/kokunai/mm/>

(編集・発行)

独立行政法人 労働政策研究・研修機構 (JILPT) (研究調整部広報企画課)
Tel: 03-5903-6253 Fax: 03-5903-6114 <https://www.jil.go.jp>